

氏名	丸 山 美 季		
学位の種類	博 士 ( 学 術 )		
学位記番号	博 乙 第 2943 号		
学位授与年月日	令和2年1月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	生命環境科学研究科		
学位論文題目	材木商人の市場対応に関する史的研究 —近世・近代武州西川材を事例にして—		
主査	筑波大学教授	博士（農学）	加藤衛弘
副査	筑波大学教授	博士（農学）	松下秀介
副査	筑波大学准教授	博士（農学）	立花 敏
副査	筑波大学准教授	博士（農学）	興梠克久
副査	東京大学助教	博士（学術）	芳賀和樹

## 論 文 の 要 旨

本論文で著者は、林業地帯の史的展開を考察するには、材木商人を軸にした分析が不可欠とする。こうした視点に立つ既存研究もあるが、市場対応については研究がないとする。それを解明するため、江戸・東京の近郊にあってこの大市場に材木を供給する西川地方を事例に、史料に基づく分析を進めた。西川地方は荒川支流の入間川・高麗川上流域に成立した杉・檜の育成林業地帯であり、そこから供給される材木が西川材である。

第一部で著者は近世に焦点を当てる。西川材を市場に販売するシステムとして山元材木商人による江戸材木問屋の出店を位置づけ、入間川最上流域にある上名栗村古組世襲名主町田家が江戸に出店した材木問屋経営の成立・展開を分析した。

まず第一章で著者は、幕府の林業政策の変遷を検討した。18世紀後半に入ると、西川地方から江戸に向けて大量の筏が流送されるようになった。その背景に、同期における幕府の林業政策の転換が誘因であるとする。第二章では、18世紀末期に町田家が最初に江戸へ出店した2つの材木問屋の経営をとりあげた。同家は既存の問屋に材木販売を委託するだけでなく、自ら江戸浅草に問屋を出店して自家の材木販売を進めるとともに、この問屋が西川地方の材木商人の販売拠点となり、以後の西川材販売を拡大した要因となったことを明らかにした。第三章では、町田家が文政11（1828）年に深川に出店した町田屋安助店、その後さらに深川に開設した2つの問屋の経営を分析した。材木取引の中心地となっていた深川への出店は、西川材の販売拡大に必要であるとともに、他地域からの材木の入荷販売にも経営を展開して、問屋経営の安定化がはかられたことを明らかにした。第四章では、天保改革による株仲間解散後における町田家問屋経営の新動向として、仲買店の開設を取り上げ、材木の生産から問屋・仲買（小売）という最終販売までの全過程に関与する、取引を有利に進めるシステムの完成について解明した。

第二部で著者は、近代日本の資本主義経済の発展に大きく寄与した材木生産業において、西川地方における同業者組織の役割を分析・考察した。

第一章で著者は、下流諸村との筏争論に対処するため、西川地方の材木商人が自主的に組織した筏仲間について検討し、19世紀初頭の結成とその後の組織強化、幕末には地域の困窮者への支援機能まで備えた社会

的組織への成長を解明した。第二章では、明治 17(1884)年同業組合準則に基づき同 22(1889)年に成立した西川材木商組合をとりあげる。西川地方の材木商人は、筏仲間をもとに同組合を組織した。同組合は筏の流送過程における安全問題の解決を図りながら、製品の品質保証、組合員への金融機関的役割なども果たして、西川材の産地整備を促した点を明らかにした。第三章では、明治 33(1900)年重要物産同業組合法に基づき同 42(1909)年に改組設立された武州西川材木商同業組合を検討した。運材が流送から鉄道・汽船輸送へと転換し、東京が近代の全国市場となり、西川地方の有利性が低下していた。そのなかにあつて、同組合は製品検査の強化、博覧会・共進会への出品などを通じて西川材の品質を高め、市場からの評価の向上をはかり、同地方の林業地帯としての発展に貢献したことを解明した。

全体を通じ著者は、西川林業の担い手である材木商人の市場対応を追究した。近世には西川材を販売するにあたり江戸市場と西川地方とを結ぶ役割として、山元の最有力材木商人町田家が江戸に開設した材木問屋が重要な位置を占めたこと、近代には市場の要求に応えるため、製品管理や品質保証、宣伝力の強化などを通じた産地確立に、山元材木商人の同業組合が重要な役割を担ったことを解明した。

## 審 査 の 要 旨

近世・近代林業史の解明には伐出業者である山元材木商人に焦点を当てた研究視角が不可欠である。著者はこの視角に立脚し、既存研究では等閑視されてきた材木商人による市場対応について、西川林業を事例に研究を進めた。材木商品の販売において重要な課題は何か、それを近世・近代それぞれにおいて追究した点にこの論文の独自性があり、高く評価できる。

近世には、規模の大きな山元の材木商人が江戸市場に材木問屋を複数開設し、そこを拠点に西川材の販売システムを確立するとともに、それらの問屋が生産地との情報交換の場となるとも分析する。材木商人による江戸市場への対応施策の観点からはもとより、山村における市場情報の獲得という観点からも新規性があり、意義ある論文である。

近代資本主義経済の発展にとって、材木は極めて重要な基本素材である。しかし、そうした材木の生産・販売に関する研究はほとんど見られない。そのなかでこの論文は、山元材木商人の同業組合を取り上げ、市場の近代化に対応してそれが産地の再編・確立に果たした役割を解明しており、極めて重要な論文となっている。

令和元(2019)年 12 月 11 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び学力の確認を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。